

# 林業とくしま



第7回中国・四国ブロック林業グループコンクールが8月9日～10日、愛媛県で開催されました。  
 本県から、美郷村のグループ「The山師」が参加し、鎌谷会長が日頃の活動を発表しました。  
 審査の結果、見事、最優秀に選ばれ、ブロックの代表として、来年3月に東京で開催される全国大会に出場することになりました。  
 ……今後のご活躍を期待いたします…

第28回  
**全国育樹祭開催決定**  
 (平成16年秋期)

平成13年8月29日の(社)国土緑化推進機構の理事会において徳島県での開催が決定されました。



「人々の  
 命をつなぐ 緑の木」  
 (平成13年徳島県緑化標語優秀作品)  
 新野高等学校2年

重村 覚 君の作品

No. **258**  
 2001.10

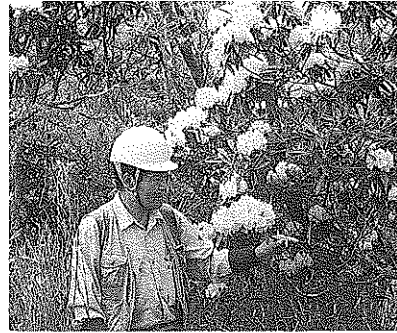


# 林業指導者会に参加して

阿南地区林業指導者会

会長

府殿長治



私が経営士会に入ったのは、認定を受けた昭和五十三年三月でありました。

その頃の林業には活気があり、私の勤めていた会社には六十人も、林業従事者がいて、伐採する人、保育する人も多く山村社会全体が潤っていたように思います。

当時の会の活動は、良質材生産を目指して、植え付け本数を多くし、枝打ちをするといった方針で、

良質な品種を選定することが主でした。

そのため、挿し木の技術に関する講習会が頻繁に開催されたり、当時の富田会長を先頭にどこそこが良い木があると聞くと、枝や実を求めて走り回りましたが、なかなかいい物に出会うことはありませんでした。結局、挿し木の延長線上にあった天然シボに行き当たり、奈良や京都の本場に目が向きましたが、苗木や穂木の入手は困難で、かつ高値で苦労しました。それでも、会員それぞれが数本ずつ植えて育てておりますが、まだ製品にはなっておりませんが、まだ製品に値に売ることが出来ませんが、立派に仕上げたいと考えております。

会の活動も、森林ボランティア事業や「湖畔の森」造りといったことが主となり、またボランティアによる造林もスギやヒノキでなく、雑木が主になってきており、何かしら残念に思います。

林業経営は、個人の力では維持出来ないようで、現在はほとんどの保育事業は補助金に助けられている状況のようです。

今後の林業はどうなるのかは判りませんが、一林業家ではやっていけないとなると県や国の助けを借りなくては行けないと感じております。

阿南地区林業指導者会も、発足以来一緒に頑張ってきた富田会長他三名が亡くなり、世代交代の時期が来ているのかと残念に思います。

しかし、残った者で天シボを立派な製品に育て、また、林業が一番最低のこの時期こそ会員全員で頑張っていきたいと考えております。日本人であるなら、やつぱりスギやヒノキの家に住むのが一番いいと多くの人が思ってくれていることを信じながら。

## もくじ (林業とくしま 257号)

やまびこ(林業指導者会に参加して).....2	林研とみんなの情報交流コーナー.....8
鉄人コーナー(天然紋を発見して) (吉野川の船大工).....3	技術情報(日本ミツバチの不思議な魅力).....10
林政の窓(間伐の推進について).....4	阿波だぬき(環境と文明).....12
特集(U・I・ターンによる林業従事者が 県下各地で活躍中) (地域の家づくりを考える 木匠塾生が活躍中).....6	東西南北.....13
	広告.....15

## 天然絞を発見して

六吹町

中山由太氏

六吹町内田で長年林業に従事している中山さんが、スギの天然絞を発見したのは、昭和五十四年頃で、近所の所有者の山を除伐しているときだったそうです。

中山さんは、昭和三十年代から当時の林業改良指導員杉山幸氏（現在林務OB）の指導を受けて、切り組みながら育種の知識や技術の研鑽に努めていました。実生苗の多い県内では、突然品種として絞の発現した木がきつとあるとの信念をもち、休憩するときも周辺の樹木に目をこらすなどして地道に取り組んでいた結果、遂に天然絞が発見されました。当時二十年生程度で谷から近い場所にあったとのこととです。絞の状態としては、「吉平」のような典型的な出絞で、こぶとこぶとの間にちりめん状のしわが入るなどめずらしいものです。親木は五年ほど前に伐採しまし

たが、約二十年前に挿し木で増やした木が胸高直径十八cm前後、約八年前に植栽したものが10cm程度になっていきます。

それら全て絞の発現が容易に確認できますし、今年あたりが一番先に挿し木したものを伐採しようかと考えているとのこととです。

中山さんは、通直材で完満な材を育てるため、適正な植栽間隔、枝打ちの時期と高さ、雪害対策などに工夫をこらしておられますが、やっぱり集約的な作業ができる場所でないとなかなか難しいと語ってくれました。

県内では唯一といってもいいくらい「天然絞」の発見者であり、その苗木を養成されている中山さんは、温厚な人柄で、林業研究グループ「内田木生会」の会長でもあります。



## 吉野川の船大工

三好町

原久夫氏



吉野川の夏の風物詩、鮎漁に使われる木造船を梶取船（カンドリブネ）と言います。

これをただ一人で現在も造り続けているのが、七代目船大工の原久夫さん（七四歳）です。

水上交通が盛んだった戦前は、徳島市内で渡し船を主体に作り、戦後は漁船も手がけましたが、昭和二十年に三野町に移り住んでから川船専門になりました。

吉野川の堤防が頻繁に決壊していた頃は、災害救命用としての需要も多く、消防署のほか鴨島町以東では各戸に常備されました。

最盛期には年間三十隻もの実績がありました。今では数隻の注文と修理の対応だけだそうです。

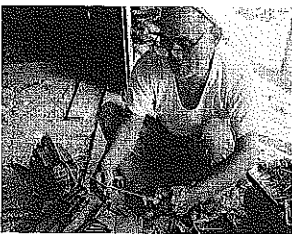
木造船は、樹脂製に較べて涼しく、河面での安定性も良いので、漁師には定評があり、釣り人のステータスシンボルでもあります。

材料はスギが主体で、底板にヒノキやツガを使うと丈夫なプロ仕様になりますが、安価で軽い総スギ製を好む人もあるようです。

材料の仕入れは、原木市場へ自ら出向いて末口六十センチ、長さ六メートル超の元玉の中から厳選します。余尺部分の長さや曲がり具合、年輪幅、適度な節も強度上の重要な要素になります。製材して三ヶ月程度天日乾燥します。

一隻に四百本も使う船釘は、鍛冶屋が一本づつ手作業で造る特製品で、今では造られていません。

技術の伝承者がいないので、せめて実物だけでも残そうと、県立博物館に一隻寄贈されました。



残り少ない逸品を手に入れた方は、急いだほうがよさそうです。

# 「間伐の推進について」

## 一、はじめに

昭和五六年度から間伐事業の補助施策が始まり、二一世紀の幕開けとなった今年、二一年目を迎えています。

当初は、良質材生産のための間伐として林業関係者の方々の多大な努力により推進されてきました。

昨今は、木材価格の低迷等による林業経営に対する関心が薄れる人や自家山林に入ったことさえない世代交代した森林所有者も増えています。

間伐は古くからの問題でありながら、新しい問題であると言われます。自分の持つ山に対する無関心を関心に替えるきっかけとして、今一度、間伐が大切になってきています。

## 二、徳島県緊急間伐推進計画

本県の人工林一八六千ヘクタールのうち一六年生から四五年生の間伐対象となる森林が七二%あります。これまで年間約四七〇ヘクタールの間伐を実施してきましたが、今なお、間伐されないで放置されている森林も多く存在しています。

県では、平成一二年度から一六年度を緊急間伐の推進期間と定め、二九六〇ヘクタールの森林を緊急に間伐することを目標と掲げました。

緊急間伐対策には目玉が二つあります。一つは間伐実施助成制度の充実と治山事業の計画量の大幅増です。助成制度の充実としては、造林・間伐事業における搬出間伐(以下「特定間伐」)に対する助成です。従来、助成対象と

なっていないかった三六年生から四五年生の人工林を対象に間伐作業から林道等の道端までの間伐材搬出まで一連作業を補助対象にしています。林令の高い人工林の間伐材の搬出には意味があり、林床の伐倒木を除去することにより、下層植生の誘導や台風などの発生時における流出による二次災害の発生を抑えるねらいを兼ね備えています。

一方、治山事業による保安林の間伐実施の計画目標を従来の約

三倍にしています。

このことにより、保安林の持つ防災機能や水源かん養機能を的確に発揮させるものであり、自然環境や地位級等林業生産上条件不利により機能の低下が懸念される高齢級(五〇年生まで)の森林を優先して間伐実施していくこととしています。

## 三、間伐推進体制

もう一つは県における間伐推進体制の整備です。間伐事業を林務事業の最重要課題と捉え、実効性の高い組織体制として、県庁の森林整備課内に間伐推進チームを発足し、各農林事務所の間伐推進員と森づくり係を配置しました。

主な業務内容は、①間伐に関する情報収集・分析、②間伐事業の計画と調整、③市町村、森林組合等関係団体との調整、連携強化、④森林所有者への情報提供・相談活動などです。今まで以上に森林所有者や林業者等との理解と協力による間伐を進めます。

間伐実施計画目標面積(単位:ha)

目標面積		事業別内訳	
12年度	5,400	造林間伐事業	19,840
13年度	5,600	治山事業	7,800
14年度	6,200	その他	1,960
15年度	6,200	※その他は県単独事業、緑資源公団、融資、自力です	
16年度	6,200		
計	29,600		

## あなたが実施する間伐に対して、助成が受けられます。



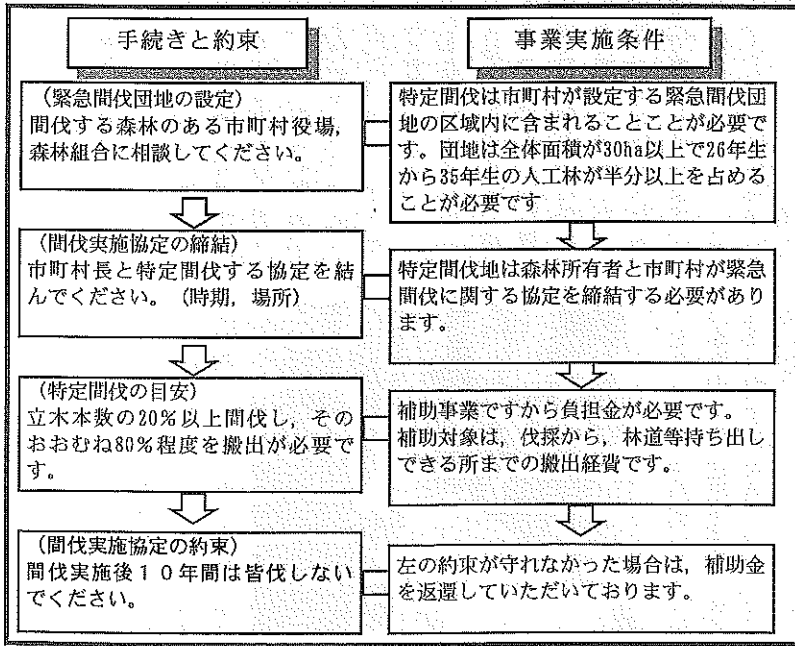
13年度における間伐実施に対する補助金（1ha当たり）

- I 水土保全森林緊急間伐実施事業・流域森林総合整備事業
  - ①通常間伐（手入間伐）林令11～35年生 60,000円～119,520円
  - ②特定間伐（搬出間伐）
    - 林令26～35年生の場合
      - ①間伐＋林内作業車で搬出整理 263,520円～292,320円
      - ②間伐＋集材機で搬出整理 361,440円～401,040円
    - 林令36～45年生の場合
      - ①間伐＋林内作業車で搬出整理 327,600円～363,600円
      - ②間伐＋集材機で搬出整理 464,400円～514,800円
- II 森林整備緊急支援事業
  - 市町村と施業実施協定を締結した36～45年生の手入間伐 124,000円
- III 緑資源有効利用促進事業
  - 緊急間伐団地以外で間伐した、100m以上の集材距離がある場所で間伐材を搬出する補助で、補助金は県が定める事業費の4分の3です。（集材機の設置、張替、山土場造成が補助対象）

注：事業主体、間伐実施協定締結等の有無等により補助金額は異なります。また、補助金には、間伐実施以外に、測量等の事務経費補助も含まれます。事業の実施にあたっては事前に市町村役場、森林組合、農林事務所林務課にご相談ください。



## 特定間伐の助成については次の手続きが必要です。



### 四、間伐実施補助施策

最後に今年度の間伐実施に対する助成制度と手続き等についてご

案内して終わりますが、この五年の緊急間伐対策では、先人の植えた森林を次代の人が受け継ぎ守る森林所有者の参加型の間伐事業にしたいと思っています。

ぜひ、皆さんの間伐した森林の隣に間伐を待っている森林があります。「間伐せんでー」と声を掛けてください。また、私達も皆さんと一緒にがんばりますので、ご活用

ください。間伐の助成制度等、わからないことがあれば、最寄の農林事務所林務課や森林整備課間伐推進チームまで、お気軽にご相談ください。

U・イターンによる  
林業従事者が  
県下各地で活躍中

本県では、平成六年度から十二年度末までに、四十名のU・イターン者が林業に従事し、県下各地で活躍しています。

「U・イターン」とは、もともと徳島県出身の人が出身地以外での生活を経て、再び出身地に戻り、そこで居住すること(Uターン)や、徳島県に縁もゆかりもなかった人が徳島県に在住する(Iターン)ことをいいます。

林業労働力の高齢化は依然として進行しておりますが、三〇才代の方が大部分である、林業従事を指向するU・イターン者に対し、林業関係者の期待は、年々大きいものとなっております。

ここで、Iターンにより林業に従事する谷内雅昭さんを紹介します。谷内さんは大阪府東大阪市出身の三十三才。

大学を卒業後、大手スーパーにお勤めでしたが、勤務時間が非常

に長く、家族と過ごす時間もほとんどない生活を変えたいという気持ちや、お子様を自然の中で育てたいという気持ちから、平成十二年四月、奥様と二人のお子様とともに、美馬郡木屋平村へのIターンを決意されました。

現在谷内さんは、佃ウッドピアで、森林施業はもちろんのこと、森林境界や現況の調査など、村内の森林管理を担う仕事をされています。



事例発表をする谷内さん

佃ウッドピアでは、平成十二年度にチェンソーによる労働災害を防ぐ作業服を導入するなど、林業労働安全に熱心に取り組んでいるところですが、このような取り組みに関し、去る八月九日に開催さ

れた「中国・四国ブロック林業労働災害防止大会」(主催：徳島県、林業防徳島県支部)において、「我が社の労働安全への取り組み」と題し、谷内さんが事例報告をされました。

谷内さんはその報告で、佃ウッドピアの皆さんが普段の現場作業時に身に付けている災害防止器具について説明され、大会の参加者からは、「わかりやすく、丁寧な説明で、良い報告だった。」と好評を博しました。

谷内さんが木屋平村に来て約一年半となりましたが、現在の心境をお聞きすると、「来た当初は、買い物に行くのも長時間かかるなど生活の不便さを感じていましたが、今ではすっかり慣れ、村の人たちとも良い関係で暮らしています。」とのことでした。

谷内さんのように、都市部から山村地域にU・イターンして来た方々は、地域林業の担い手だけではなく、地域振興の中心人物として活躍されていると耳にすることも多くなってきました。

さて、県内には、谷内さん以外にも、林業で活躍されているU・I

ターン者がたくさんおられますが、県外の方が「徳島で林業をしたい。」という場合、林業事業体などを紹介する窓口となるのが徳島県林業労働力確保支援センターです。

同センターで昨年十一月に開催された「徳島県U・イターン林業合同説明会」では、主に京阪神から三



「徳島県U・イターン林業合同説明会」の模様

十七名の参加者が集い、求人中である県内の四林業事業体と熱心に就職に関する説明・相談がなされました。

今後とも、U・イターン者は増加する傾向にあると考えられ、徳島県の森林整備はもとより、地域の振興に大きく貢献されることが期待されます。

林業振興課団体指導担当



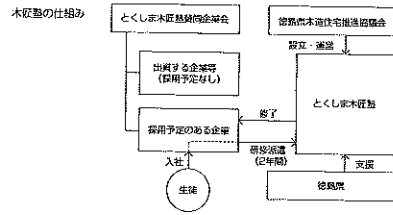


一 はじめに  
とくしま木匠塾(塾長 速水剛)は、大工技能者の養成を目的として平成七年四月に開校された職業能力開発校です。

木造住宅の担い手である大工技能者の後継者不足は深刻であり、このままでは将来の木造住宅づくりに支障をきたす恐れがあります。そのため県内の建設会社、大工・工務店などが出資し設立されました。三千日の徳島戦略「県産木造住宅供給システム」の人材育成部門としても位置づけられており、林業界とも密接な関係にあります。

二 木匠塾の仕組み  
木匠塾の仕組みは、大工を志望する高校卒業生などが県内の工務店に就職し、その企業に社員として在籍しながら二年間の研修を受けるというものです。

研修期間内に、墨付けから切り組み、造作まで大工としての基礎的な技能はもちろん、構造力学や



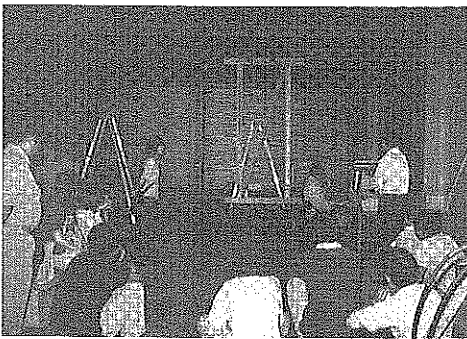
木匠塾の仕組み

建築計画、製図等の建築に必要な基礎理論を身につけます。これまでに九四名が入塾し、現在六期生、七期生一三名が勉強しています。

### 三 新世代木造住宅の担い手

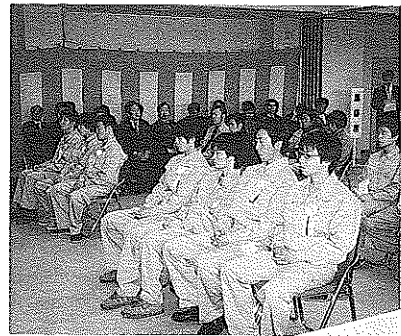
住宅を巡る環境が大きく変わつつあります。このため木匠塾では、時代の変化に対応できる、新しい木造住宅の担い手を育成するためのカリキュラムを組んでいます。建築CADや見積もり計算ソフト

等の情報処理技術、いわゆる住宅IT技術の修得や、建築基準法の改正や住宅品質確保法での構造



筋交いの強度をみる(木材需要開発センター)

規定への対応を図るとともに、シックハウス対策などの実践的技術を学びます。  
写真は、とくしま木匠塾の生徒が、木材や建築物の構造強度についてより理解を深めるため木材需要開発センター(森林林業研究所内)の試験機器を用いて実習を行った様子です。  
木材が実際にどれくらいの荷重に耐えるのか、などを実体験することで、講義の理解を深めようというものです。生徒達は自分たちで製作した壁パネルを実大材試験機で破壊試験を行い、その性能を確かめました。



木匠塾の七期生入塾式の様子

### 四 さいごに

地域の木工・工務店が在来木造住宅を支えています。大工一人一人の木拾いによって林業が支えられている、とも言えるのではないのでしょうか。

木匠塾の今後の活躍に大いに期待しています。

林業振興課木材林産物担当

◎木匠塾の訓練場所

鳴門市撫養町

鳴門地域職業訓練センター内

(〇八八―六八六―五七五八)

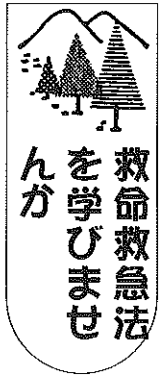
◎木匠塾の問い合わせ先

徳島市津田海岸町

徳島市木材業会館内

(〇八八―六六三―三二〇九)

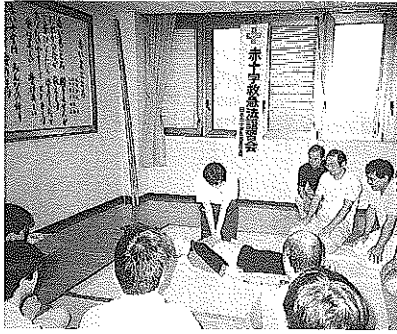
# 林研とみんなの情報交流コーナー



去る七月五・六・十六日の三日間、日赤徳島県支部のご協力により、林業従事者救命救急法講習会が開催されました。

講習会には、徳島、川島管内の森林組合や事業体から十八名が参加し、人工呼吸や心臓マッサージ、止血法などの実技に真剣に取り組みました。

林業災害では、応急措置が被災者の救護に大きな影響を与えます。多数の関係者が救急法の知識を持つことが期待されます。



## 炭窯エクスカーション

池田からは、前回お伝えした「三好郡 炭の会」の活動報告です。まず始めにお互いの炭窯を見つみよう(チェックしたい!)というわけで、去る五月十日早朝から総勢十三名で炭窯エクスカーション(めぐり)が始まりました。

始めは、三加茂町の加茂山木炭生産組合。ここでは、木炭の他に木酢液を一窯で五十リットル生産しており、三年間寝かしたものを販売しています。西井川林業クラブでは、林研の趣味と実益を兼ねた新しい炭窯で、沢沿いにあり、大学の森や小学校などのイベントに活発に利用されています。

次は、三角形のかわいい箱が有名な池田の山水会です。少ない人数ながら多くの収益をあげています。一山越えた井の久保林研では、自家製の薪割り機が導入されており、長さ百三十三センチまでな

ら簡単に真つ二つにできるということでした。

お昼には、馬路の夢いっぱい会で一服。ここには一回で八百kgの焼ける巨大炭窯があり、炭焼きだけでなく陶芸教室など色々楽しめる施設となっています。

このようにして管内八箇所を巡り、最後には西祖谷まで到達しました。ハードな日程となりましたが、会員の満足のいく楽しい一日となりました。



## 木沢村にも炭窯誕生

木沢村川成に住む小森源六さん(七三歳)は、植林や伐採など長く林業に携わってこられ、さて、これからはうしよつと考えた時、そうだ、炭焼き

をもう一度やってみようと思いつたそうです。近所の神本国一さん(八四歳)の協力で窯作りに取りかかり、五月には、最も重要な天井部分を作るころまでこぎ着けました。

小森さんに出会ったのもちょうどこの頃で、蜂の巣のようにポコポコと穴が開いている「物体」を不思議に思い声をかけたところ、これは天井を均等に固く締めるための作業で、次に残った部分も平らになるまで叩き、窯口で少量の火を焚きながら何度も繰り返して、ゆっくり、ゆっくり乾燥させることで丈夫な天井になる、とのことでした。

現在は小森窯も完成し、焼き上がった炭は、四季美谷温泉などで活用されています。

小森窯は、川成からスーパー林道に上がる藤ヶ内林道沿いにあります。みなさんも木沢村に来られた時には、ちよつとのぞいてみませんか。





# 林研とみんなの情報交流コーナー



学んでいます

## 広葉樹苗木生産

高丸山周辺で整備が進む「千年の森」では、広葉樹林の再生を目標の一つに掲げており、今後、町内産の種子による苗木の供給が必要になってきます。このため、徳島農林事務所では、広葉樹苗木に興味のある関係者により、広葉樹苗木生産の勉強会をはじめることになりました。

第一回の勉強会には、「上勝など」受林会や八重地集落の有志など五名が参加し、コンテナによる苗木生産の概要について学習しました。

コンテナ育苗とは、マルチキャビティコンテナという特殊な栽培容器を使って苗木を生産する方式で、根切りや床替えといった手間のかかる作業がいらす、女性等でも楽に効率的に苗木生産が行えるシステムで、今後は筑波の森林総合研究所等の支援も受けながら、研究と実地検証を進めていく計画です。上勝町在住で、広葉樹苗木に興味のある方は、是非参加してください。

徳島農林事務所 早田健治



スギ間伐材を活用しましょう

## 川島管内からの報告

とくしま森とみどりの会川島地区委員会では、緑の募金還元金事業で、木製プランターを作成しました。これは、美郷村内の林研グループ「The 山師」に依頼し、美郷村内のスギ間伐材を利用し、作成しました。

間伐材を利用した地球環境に優しいプランターとして、管内役場、小中学校に配布すると共に、川島合同庁舎一階ロビーに、設置しました。農業振興課の協力を得て、管内花卉園芸の主力商品であるハイビスカスを



寄附していただき、スギの木肌に赤と黄色の花がマッチし、玄關ロビーに彩りを添えることができました。



登山道の刈払いに汗を流しました

## 一宇村林業研究倶楽部

脇町管内の一宇村林業研究クラブが、さる七月二十二日(日)矢筈山登山道の下刈作業を行いましたので紹介します。

当会の会員は九名で、主として森林所有者かつ素材生産業、林業従事者ですが、当日は会員など六名が参加し、炎天下のもと標高一三〇〇mの石堂神社を朝八時四五分出

発し、刈払機を肩に乗せて、標高一六三六m石堂山まで約三・二kmを登り、休憩後標高一八四八mの矢筈山に登りながら刈払い作業を開始しました。矢筈山は一宇村の西の端で東祖谷山村との境にある一宇村最高峰で、当日も愛媛県からの団体が登山に来ていました。

会員は、刈払機を巧みに使いながら約二時間で石堂山から矢筈山までの登山道の刈払いを終了。その後引き返し、石堂山から出発地点の神社までは下山しながら作業を行いました。神社到着が午後六時。往復一〇・四kmの行程で、会長の斉藤吉明氏(四四歳)は、「昨年は夕立がきて大変だったけど今年は天気に恵まれた。これで登山者の方も気持ち良く登れるだろう。」と満足した様子でした。

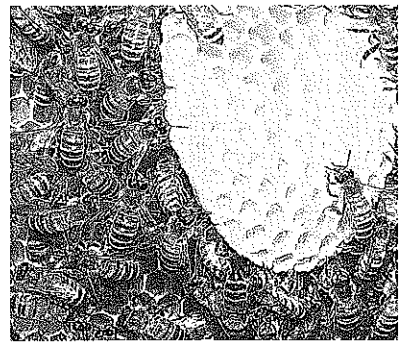


# 日本ミツバチの不思議な魅力 —あなたも在来ミツバチを飼ってみませんか—

徳島県立農林水産総合技術センター  
森林林業研究所  
専門研究員兼科長

川村英人

「ハチミツ」と聞いて何を連想しますか？最近、蜂蜜も安くなつて、スーパーなどでは一kg瓶で三〇〇円程度で売られているものさえありますが、これらは中国等から輸入された蜂蜜で、中には加糖処理された低質なものもあります。今回はその蜜を採るミツバチにつ



いての話です。

## (1) ニホンミツバチって何

日本に在る「ミツバチ」には、明治期に導入され、皆さんが普通見ている主に平地部で活動する西洋ミツバチと太古の昔から日本に生息し、主に山間部が活動域の「地蜂」と呼ばれるニホンミツバチがいます。

西洋ミツバチはヨーロッパで飼育技術が確立され、管理された家畜と同じ扱いです。改良品種なので病虫害に弱く、天敵のスズメバチに対する防御法もありません。それに比べるとニホンミツバチは、野生種なので管理飼育が難しく、逃亡癖もあるので、ある意味自然な状態で飼われているといえます。

飼育方法も地方によって様々です。

明治以前は、蜂蜜は貴重な甘味料で庶民の手に届く存在ではありませんでした。それが採蜜量が三〜五倍もある西洋ミツバチが管理技術と共に明治期に導入されると国内に普及し、平地部では優勢な西洋ミツバチが生息域を広げ、ニホンミツバチは山奥に追いやられました。しかし、近年、輸入蜜の増加と蜜源の減少により西洋ミツバチの飼育数が減った事で都市部や里山でニホンミツバチが見られるようになってきました。

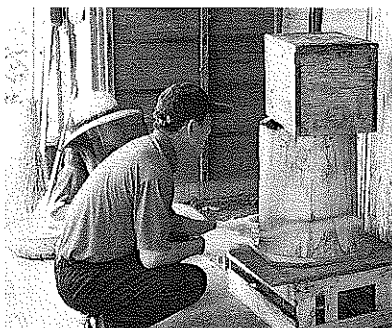
## (2) ニホンミツバチの有用性

このニホンミツバチの蜜が最近見直され、本物志向、健康志向ブームに乗って人気が出来つつあるのです。西洋ミツバチの蜜がミカン、レンゲ等といった単一蜜源なのに対し、この蜜は年間を通して自然樹木の花からの混合蜜なのでミネラル分が多く、滋養が良いとされています。

近年、徳島県の森林林相も吉野川北岸域を中心に徐々に変わってきており、松枯れ跡地には自然

に照葉樹林が生えてきています。スギの人工林地帯でも齢級が高く、間伐が進むにつれて下層植生が形成され、また、伐跡地で造林放棄地の自然更新も進んでいます。そして里山では薪炭林が放置され、パルプ材としての利用もされないまま雑木林が広がっています。

このことはニホンミツバチの生息に良い環境になって来ていることを意味します。ニホンミツバチの蜜源は、主に山の草木で、春のスダジイ、ウツギ、クリ、夏のクロガ



海部郡内での採蜜作業状況

ネモチ、ネズミモチ、タラノキ、クズ等が上げられ、冬にはピワ、ツバキ、サザンカ等も採蜜します。また、西洋ミツバチの蜜源と同じミカン、

アンズ、モモ、ウメ等の果樹も好む  
 そうです。

### (3) ニホンミツバチの可能性

ニホンミツバチの蜜は、価格が希少性から高く、県下でも1kg当たり七千円程で販売されており、県によつては一万円近くもする処もあるそうです。しかしながら生産量が安定せず量も少ないので、販売する側も積極的なPRが出来ていない状況です。むしろ、仕入れ価格はその六割程度となるそうですが、一群当たりの年間採蜜量が五〜十五kgあることを考えれば、五群いれば副収入が約十五万円になる皮算用です。さほど管理する手間を必要としないことを考えれば山間部の貴重な収入源となりうる可能性があり、地域の特産物として売り出すことも可能なのではないのでしょうか。

県下の山間部では従来から自家消費用として「地蜂」(ニホンミツバチ)を飼う風習があったみたいですが、高齢化や後継者不足また人工林化による蜜源の減少から次第に廃れていったみたいです。

しかしながら海部郡や県西部の一部では、今でも熱心に飼育して

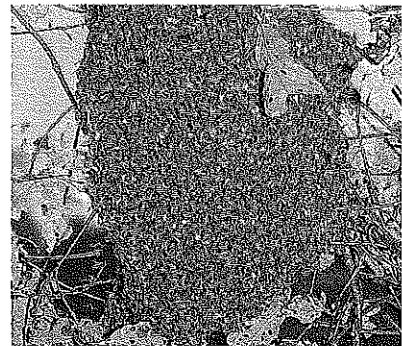
以下にニホンミツバチの飼育スケジュールの一例を述べてみます。

時期	作業種	概要説明
4月	分蜂群採取	この頃から分蜂が始まるので、トラップを仕掛ける
5月	分蜂群採取	採蜜、育児、分蜂が最も盛んになり、忙しい
6月	分蜂群採取	採蜜、育児、分蜂が最も盛んになり、忙しい
7月	採蜜	下旬位に採蜜が出来る
8月	採蜜	花が多い地域は2回目の採蜜が可能か
9月	スズメバチ対策	天敵のスズメバチの飛来が多くなる
10月	巣箱の清掃と内検	巣枠の整理と給餌をチェック
11月	給餌と保温対策	巣内で冬越するので、清掃と給餌
12月	給餌と保温対策	巣内で冬越するので、清掃と給餌
1月	巣箱作り・修理	蜂の活動が少ない時期なので巣箱を増作する
2月	巣箱作り・修理	寒い時期は巣近くで脱糞するので洗濯物に注意
3月	巣箱の清掃と内検	産卵と育児が盛んになるので給餌も考慮

※興味ある方は、次のホームページも御覧ください。

「ニホンミツバチ」 <http://member.nifty.ne.jp/smk/index.htm>

※参考文献 「ニホンミツバチ」在来種養蜂の実際 日本在来種みつばちの会編



巣を出た分封群は、近くの木に集まって蜂球をつくる。

いる地域があり、副収入としてもそれなりの成果を上げているグループもあると聞いています。この機会に山村に住む者として夢とロマンもある「地蜂養蜂」に取り組んでみることも面白いのではないのでしょうか。

※森林林業研究所においても、最近取り沙汰されている広葉樹の有効利用法やその増加検証の指標、また、山間地の特産物振興の一助として調査を行ってみる必要性を感じています。ご意見ご質問があれば当研究所森林環境担当までお知らせください。

# 環境と文明

協町農林事務所

林務課長 宇水泰三郎



人類の歴史は、文明の萌芽↓発展  
↓繁栄↓衰退を繰り返してきました。

この一連の変遷過程で、人類による  
地域環境破壊等で、ついに、そこに住  
む人類自身の存在さえも不可能な  
地に変え、衰退への道を辿った多くの  
史実があります。

そのひとつの事例を、モアイ像で有  
名なイースター島の歴史にみるこ  
とができます。

イースター島は火山島で、南米チ  
リの沖合、太平洋上に浮かぶ絶海の  
孤島です。面積は、一八〇km<sup>2</sup>です。島  
の歴史を辿ってみると、

四〇〇年 ポリネシア系人が、島  
に定住を開始。島はヤシの原木が生  
い茂る深い森に覆われていた。定住後、  
海岸部の森から開墾が行われた。

八〇〇年 森林破壊が始まる。守  
護神モアイを作った。島の岩は柔らか

く硬い石で削り出し木で運んだ。

一二〇〇年 人口爆発七〇〇〇  
〜八〇〇〇人(約二万人とも)。森が  
減り生活が苦しく争いが始まる。苦  
難を助けるとモアイが作られ、このこ  
とが森林に拍車をかける。

一四〇〇年 ヤシは全滅して漁  
ができず、イルカの骨が消えた。人口  
は減少。

一五〇〇年 歴史がとまった。火  
山爆発か岩に直径一m、長さ二十m  
の椰子の木の跡。

一七〇〇年 食糧争いから、かな  
わぬ願いとモアイは倒され、目はうち  
くたかれた。森を切ったことで起きた  
悲劇。

一七二二・四・五 オランダの探  
検家が島を発見。

一九七〇年 植林を始めた。  
一九九五年 高さ三mをこえる

木が一本もない草地の島。野生動物  
は昆虫のみ、家畜は鶏のみ、人口は二  
八〇〇人。

二〇〇〇年 人口は三〇〇〇人、  
年間三万人ものモアイ見物の観光収  
入で暮らす。食糧はチリから

イースター島の教訓

自然環境破壊の果てに島はうち捨  
てられ、なぞのモアイ像がたえずむ絶  
海の荒れた土地となった。

「森を失ったイースター島の経験は  
地球のどこでも起こり得る」と言わ  
れています。島の歴史は、自然も資源  
も限られた「宇宙船地球号」に生きる  
人類への警鐘にほかならないと言え  
ます。



## 徳島 実験を基に 林業教室を開催

七月十六日昭和小学校で林業教室を行いました。

まず初めに森林の役割・大切さの話をした後、森林土壌の保水力を調べる実験をしました。これは半分に切ったペットボトルに色々な場所の土壌を層が崩れないように入れて上から水をかけると、水がどれくらいの量や速さで落ちてくるかを土壌ごとに比べる実験でした。実験の結果、森林土壌の保水力や濾過能力がはつきり分かり生徒も私もびっくりしました。今日子供は無気力だとか子供らしくないなどと言われがちですが、生徒達は純粋に喜び驚いてくれました。そういつた子供達の純粋な気持ちを大事にしたいし、また子供達に森林の

大切さを理解してもらうことが私達の役目だと思えます。

徳島農林事務所 貝出留美



## 日和佐

### 由岐町・白和佐町森林組合 合併が正式決定

由岐町森林組合と日和佐町森林組合とが、平成十三年十一月一日に合併することになりました。

両森林組合は、平成十一年度から合併の協議を進め、今年六月五日、日和佐町役場において、関係者三十一名の出席のもと合併予備契約の調印を行いました。

また、七月三十一日には、両森林組合の総会において、合併が承認さ

れ、合併が正式に決定しました。

合併後の存続組合は、日和佐町森林組合とし、組合の地区は、由岐、日和佐の両町、森林面積一、二、四一三ヘクタール、組合員数九二二名の森林組合となります。

林業を取り巻く環境が厳しいなか、地域の森林管理に果たす森林組合の役割は大きく、合併後の森林組合が大きく飛躍してくれること期待されています。

日和佐農林事務所 徳永 章



## 川島 オイスカ徳島 下刈ボランティア に参加して

七月八日に美郷村のほたる館周辺で、下刈ボランティアが開催され

ました。これは、オイスカ徳島と美郷村の主催で、平成十一年度から、山林・SUN植林体験プロジェクトとして実施されており、ほたるの生息地として有名な川田川の周辺部に広葉樹を植林し、ほたるの生息し易い環境をボランティアの手で築きあげるものです。

当日は、七九名が参加し、この二年間に植林されたケヤキ、サクラ一・一haの下刈りを実施しました。梅雨の中休みの快晴に恵まれ、猛暑の中、約二時間半で作業は終了しました。

植林されたケヤキとサクラは、順調に生長しており、今回の作業により、ほたるが飛び交う環境づくりは、さらに一歩前進したと思います。

また、十一月二十五日には、ケヤキの植林を予定していますので、参加をお願いします。

川島農林事務所  
井関廣幸



## 脇町

### とくしま森づくり構想への第一歩 緑の少年隊に森林教室開催

去る六月二十五日に脇町の大有小学校で森林学習教室を実施しました。これはとくしま森づくり構想への意見募集として、緑の少年隊から将来「こつ」なうて欲しい「森林のイメージ」を、作品としてまとめるきっかけ作りがねらいです。

事前の打ち合わせで、生き物の豊かな森づくりを目指したいという学校側の希望もあり、生態系と森林土壌の働きについての内容としました。学校に隣接した山林で実際に土壌断面を観察してもらい、さらに持ち帰った森林土壌を、畑の土や砂場の土、崩壊地の土などとバットボトルを使つたる過実験を行いました。パンプレットやビデオで補いながら、森林が大きな傘となつて多種の生物をつなげ、土壌を守り水を生み出している事を説明しました。資料集めや実験の準備が大変でしたが、小学生の興味一杯の眼差しに、少しは報われたかなと思います。

作品としては、野鳥や昆虫などの生き物の豊富な森を木の板を使つた

壁掛け飾りで表現してもらおう予定で、どんな作品ができるか楽しみみです。

脇町農林事務所 上田信一



## 池田 「徳大生林業体験学習」の開催

今年で四回目になるこの行事が七月六日から八日までの三日間、井川町において開催されました。

初日の夕方に「森林体験交流センター」に学生十九名が集合して地元と交流を深め、二日目は下刈り、間伐、枝打ちなどの作業を終日体験し、貴重な汗を流しました。

三日目は午前中に西井川林業クラブの炭窯、薪割りと釜入れ作業を

行った後、午後からは井川町中央公民館において、「バイオマス林業」をテーマに、フォーラムが開催され、徳大生がインターネット等でリサーチした海外の事例や現状の課題などを発表しました。

バイオマス技術には林業不振の払拭と中山間地域活性化の可能性があるという話題に、地元関係者も大きな期待と関心を持ちました。

年々内容が充実しているので、今後支援していきたい行事です。

池田農林事務所 兼松 功



## 阿南 小学生が 机・イスを組み立て

八月六日、羽ノ浦町の岩脇小学校において、県産スギの間伐材を利用した机とイスを組み立てるイベントを開催しました。

羽ノ浦町は、県の補助制度を活用して学校用の机・イスを導入することにしており、単に完成品を導入するのではなく、児童自らが組み立てることにより、物を大切にすることを培ってくれたらと考え、このイベントを企画しました。

当日は、二学期から使用する一学年用の四二セットの机とイスを約一時間かけて、児童とその保護者、学校関係者、製作担当者等で組み立てましたが、暑い体育館の中で汗を流しながら行ったことは、子供達にとつて良い思い出とともに卒業するまでの六年間大切に使用されることと思います。

自分たちが苦労して組み立てたこの木製の机とイスが子供達の小学校時代の良きパートナーとなることを期待しております。

阿南農林事務所

山根 誠

